

鹿大広報

No.152

Jan/2000

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会



特集：2000年の門出

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>



永 光 英 之

■新しい門出にあたって

雄大な桜島を眺めながらの大学生活が、気が付けば6年も経ち、社会への門出が近づきました。振り返れば様々な出来事がありました。私達歯学部17期生はカリキュラム変更後初めての学年であり、試験・実習・学園祭などで常に手探りな状態でした。そのような中、2つのサークルの部長や桜ヶ丘祭実行委員などを引き受ける事となり、非常に多忙な生活でした。様々な価値観を持つ人達の中で先々の事まで見据えつつ最大公約数を求めてゆくのは大変困難であり、悩む日々が続きました。そのような中、親身になって手を差し伸べて下さった先生方、職員の方々や先輩、級友、後輩との出会いが嬉しく、私にとって忘れ難い一番の思い出となりました。

社会に出てからも鹿大での生活を糧として現状に満足する事なく、納得できる日々を積み重ねて仕事に取り組んでゆきたいと思います。御世話になりました皆様、どうも有難うございました。

(歯学部歯学科6年 永光 英之)



大 森 健 一

■修了にあたって

今振り返ってみると、万事うまく過ぎ去った事よりも、辛く逃げ出したかった事の方が強い思い出として残っているから不思議です。印象材をテーマに実験に取り組んではみたものの、思うような結果が出せず困っている私を、平日はもとより土日もしもに指導して下さいた先生方には本当に感謝しております。一つ一つの過程を確実に積み重ねていくことで、必ず結果は付いてくるということを痛切に実感しました。さらに、研究漬けの日々の中で一つのことを深く探求していく材料開発の面白さ、奥深さ、そして難しさを知ることができたのは、非常に有意義な体験でした。実験を重ね、データを分析し、自分の中で理論を構築していく間に、物事を思考する際に様々な角度からとらえていくということの重要性を改めて認識しました。これからの人生、このかけがえのない4年間の経験を生かせるよう、常に研究心を持って頑張っていきたいと思います。

(歯学研究科4年 大森 健一)



前 田 朋 也

■卒業と進学

大学に入学してから4年が経とうとしている。あっという間に過ぎてしまった感じがする。大学に合格して、やりたい事やどんな事が待ち受けているのかという希望に胸を膨らませながら大学生活を始めたのがつい昨日の事のように思い出される。そして卒業が近づいてきてこの4年間を思い返してみると、楽しい事もあったし、たくさんの人に迷惑をかけてしまった事もあった。しかしその中から自分にとって数多くの経験を積むことができたし、いろいろな事を学ぶ事ができた貴重な時間であったと思う。本当に充実した4年間だった。

大学院に進学すると研究内容でのゼミや論文発表があり、内容もずっと難しくなるだろうから、今までに自分が得た専門知識でこれから通用するか多少不安である。しかし、学生時代に学んだ知識や経験を生かして、大学院での自分の研究について、さらなる勉強をし頑張っていきたいと思う。

(工学部電気電子工学科 前田 朋也)



木 村 至 伸

■「発想の転換」

否定的に捉えていた物事を肯定的に捉えることが出来るか、それが1つの「発想の転換」であると思う。例えば、同じ時計の針を見て『もう』と思うか、『まだまだ』と思うか。事実は変わらないが、自分の心構えは全く異なる。つまり、『もう』は自分の限界を決定するのに対し、『まだまだ』は自分の更なる可能性を信じることであると思う。言い換えるなら、プラスのイメージを持つことであると考える。人生には、幾多の壁が待ち受けていることであろう。この壁をどう捉えるか？消極的に臨むか、積極的に臨むかで、自分の取り組む姿勢が異なると思う。また、人生は一度しかない貴重な時間である。その時間を有効に使うのも、自分の心構え次第である。今の私に「発想の転換」が出来ているか疑問があるが、志を高く持ち、自己を高め21世紀に向かって飛躍していきたい。

(理工学研究科2年 木村 至伸)



井 上 勝一郎

■退官までを振り返って

昭和56年11月に赴任してから18年と5ヶ月、早くも退官の時を迎えました。この間を振り返ると、ただただ忙しい日々だった一言に尽きる様な気がします。赴任からの数年間は研究に必要な器械器具の整備・拡充に奔走し、その後は、会議会議で明け暮れた様に思います。大学院の学生諸君の実験指導は殆ど夜となり、私自身の要領の悪さも加わって、いろいろと迷惑をかけたという印象が強く残っています。教室員の先生方に助けられ、どうにか無事退官を迎えることが出来ましたが、今、振り返ると研究面でもう少し時間的なゆとりが欲しかったというのが実感です。

現在、学内では教養部改廃統合後の共通教育の問題、国立大学の独立行政法人化の問題など、多くの難題を抱えていますが、これらの問題を克服し、21世紀に向け鹿児島大学が益々はばたくことを祈念して退官の挨拶とさせていただきます。

(歯学部教授 井上勝一郎)



松 村 博 久

■老兵の反省

鹿児島大学へ赴任以来36年とその前の他大学の6年を加えた42年間を無事勤め上げて(?)の定年退官です。今までの人生の3分の2を研究と教育にたずさわってこれたのは、周辺の教職員ならびに関係者の皆様のご指導およびご支援があったからです。ここに深い感謝と厚い御礼を申し上げます。

現在の経済社会の繁栄や家庭生活の豊かさは、大量のエネルギー消費で築き上げられてきたものです。エネルギー資源のほとんどを国外に頼っている状況ですから、エネルギー源の新規開発やエネルギー有効利用の技術推進についての研究と教育に努力してきました。わが国の将来に向けたエネルギー安定供給の一端しか担えませんでした。余生は老兵の小さな力でもって、蓄積してきた専門を使ったボランティアで社会に貢献できればと思っています。創立50周年を迎えた鹿児島大学が、地域および国際舞台において飛躍されることを期待いたします。

(工学部教授 松村 博久)



鎌 田 薩 男

■夢追う鹿大よ永遠であれ

幾度目かの春の訪れと共に停年退官の日を迎える事になった。まだやるべき事を残していた私にとって、この退官の節目には、やや戸惑いを感じている。

大学から眺める桜島の雄姿は、明治維新の頃とあまり変わらないと思うが、2000年の新しい時代を迎えた今日、独立行政法人化問題が到来し、鹿大にもその機構改革が強く望まれている。かつて、工学部の古き先輩教授から、“わし等の頃は大学存続と研究の基礎作りに努力してきた。君等にはこの基盤の上に工学部を発展させるべき責務がある”と励まされてきた。以来、大学本来の姿に近づき、博士取得を可能にした。これこそ研究を担う学部を発展したといえる大学の卵の誕生であろう。今後は日本南端のユニークな大学として、若き人達がこの卵を大きく発展させ、研究技術の情報発信基地としての夢追う大学である事を祈念する。

(工学部教授 鎌田 薩男)



堀 口 毅

■大学はポランのひろば

今年がいわゆる「昭和一桁生れ」が定年退官する最後の年になります。私がちょうど小学生の時戦争に敗れ、社会の価値観が軍国主義から民主主義へと180度転換したことが私の人生に対する考えを大きく左右することになりました。どうしたら本当の事を知ることができるのかを一生懸命に考え、戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」などを読んで、大学生は真実を知っていたのではないかと思い、大学に入って勉強したいと思いました。教科書の「雨ニモマケズ」の詩が印象的で、「貧しさからの開放」が重要課題のように思われ、農学を志すことにしました。

幸い人生の大半を大学で過ごすことができました。私の学生時代は貧しかったけれども、仲間をつくって夢を語り合う自由な「ひろば」があり、私自身は地域活動しながら学生時代を過しました。この頃の大学は豊かさの半面現実的になり過ぎていように思われ残念です。この鹿児島の地にすばらしいイーハトーヴォがつくられることを願っています。

(農学部教授 堀口 毅)



石 畑 清 武

■開拓は無限

あらた魂に惹かれて、鹿児島大学農学部附属農場指宿植物試験場に赴任したのは昭和35年2月であった。この頃の試験場には約250種類の遺伝資源作物が保存されていたが、研究施設は淋しかった。大正7年から、温泉熱と熱帯植物を利用した農業は全国に貢献しており、鹿児島大学の誇る施設と自負できた。

昭和37年には皇太子・同妃殿下（現天皇・皇后陛下）のご訪問を受けた。その準備に数カ月余り昼夜職務に追われ、植物類の学名を覚えたこと等は生涯の思い出である。

以来、海外学術調査の多くの機会をいただき、調査国の理解と協力を得て3,000種以上の熱帯・亜熱帯作物類を植物試験場へ導入し、それらを評価して、協力先へも報告した。

導入種のうち、直接利用できた数10種は地域へ送り出した。形質改善を行なうことで、温帯地方で生産でき、それらの持つ機能性の恩恵を期待できる種が多い。

遺伝子を動かしている機構はまだ不明であるが、21世紀にはあらゆる生物の遺伝子情報は解明されると確信する。研究者は際限なく研究に挑んでほしい。2000年はその道を拓く年となることを期待したい。

（農学部教授 石畑 清武）



東 川 勢 二

■万里の海を駆け終えて

海上勤務（37年間）という肉体的にも、精神的にもきびしい条件下で、定年退職の日を迎えることができたことは感慨深いものがあります。そして、船の安全管理、安全運航に全力を注ぎ、職責を全うできたことは、かごしま丸職員、教職員の皆様の協力のたまものと感謝の気持ちでいっぱいです。顧みますと、毎年インド洋や、南太平洋などへ練習航海し、長期実習訓練のなか学生達と海について学び、考え、練習船教育の使命を果たしてきました。また諸外国寄港地では大学訪問や、一般市民、在留邦人、鹿児島大学卒業留学生の皆さんと友好親善に尽くし、鹿児島大学の練習船かごしま丸として、自信と誇りをもって万般の活動をしてきました。そのため、かごしま丸は諸外国各地でそれなりの評価は得られていると自負しています。しかし、練習船は縮小されようとしています。広く論議をつくしよりよい解決策をだしてほしいものです。終わりに鹿児島大学の益々の発展と皆様方のご健勝を祈念します。

（水産学部教授（かごしま丸船長） 東川 勢二）



福 永 孝

■思い出

私が大学事務に携わった当時は、今と同じく就職難でありました。従って、どんな職業でも良いから、とにかく職に就くことしか考えていなかったことが思い出されます。それから40年経た訳ですが、大学事務の中で特に印象に残っているのは、昭和40年頃、国立大学が特別会計となったとき、いろんな事業予算が計画され、その対応に日夜仕事に追われたこと、平成5年全国の国立大学附属病院が赤字財政となり、その対応に病院長と一緒に取組んだこと、平成7年神戸大で、関西大震災直後、その災害復旧に休日返上で対応したことなどが思い出されます。今まで多くの先輩や同僚、後輩に恵まれ今日の私があるにつくづく感謝しています此の頃です。定年後、自分の進む方向が定かでない現在ですが、少々の空白時間をつくりじっくり考えたいと思っています。鹿児島は二度の赴任地でしたが多くの友人が出来、大変楽しく仕事をさせていただきました。本当にありがとうございました。

（医学部 福永 孝）



川井田 清 広

■20世紀の私

私は昭和42年に鹿児島大学経理部経理課の会計事務として採用され、その後様々な学部の事務に携わりました。その中でも病院受付事務をはじめ、入来牧場で牛のセリ市、水産学部での船舶の外国入国手続など多種多様な経験をする事ができ、専門の方や諸先輩の協力を得て、仕事の厳しさを学びながら自分の幅を広げることができました。

また、定年前の最後の年に2000年問題対策のために緊張の中、新年を迎えるという貴重な体験ができました。まさに時代が移り変わる瞬間を見たようでした。

さて、私は20世紀最後の年に定年を迎えた訳ですが、アナログ時代が終わりデジタル時代が到来したように次代を担う若者も古き伝統等にこだわらず進化してください。鹿児島大学は今後独立行政法人化への難題がまちうけております。良き伝統と斬新な発想が融合する大学と生まれ変わってほしいものです。最後にこれまでお世話になりました皆様方のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

（歯学部 川井田清広）

鹿児島顔談話会の発足

最近、顔についての関心度が非常に高く、昨年度は東京の国立科学博物館において大“顔”展なる博覧会も開催された。歯学部でも、普段の歯科治療を通して顔についての関心は高くこの度鹿児島顔談話会を発足した。会員は現在のところ数名であるが、本年8月19日（土）～20日（日）にはこの会が中心になり鹿児島での日本顔学会顔フォーラム2000が開催されることも決定している。本会は、今後、顔に関して興味をいだく人々に広く声をかけ広げていこうと考えている。現在の会員を紹介する。

① 口腔解剖学Ⅱ講座（島田和幸）

感情表現に係る表情筋群の形態とそれらの筋群への支配神経分布の様式についての基礎的研究をテーマとしている。

② 歯科矯正学講座（伊藤学而）

矯正歯科治療では、歯並びや噛み合わせ、口元や顎の形を整えます。治療が終わると、患者さんの表情も明るくなります。しかしこれだけが目的ではありません。矯正歯科治療によって咀嚼、嚥下、発音という口の働きが改善し、歯の破折や口腔粘膜の損傷を予防し、齲蝕や歯周病に罹り難くなることも大切な目的です。口元を中心とした顔の形と機能、さらに顔のもつ社会性が私達の大切な研究テーマです。

③ 口腔外科学Ⅰ講座（杉原一正）

口腔外科的疾患と顔：口や顎骨、顔面には口唇口蓋裂などの生まれつきの病気から顎骨骨折、口腔癌、歯性炎症、顎変形症など生後にもいろいろな病気が発生し、進行しますと顔の変形を来します。手術により治療しますと術後に口や顔の変形や瘢痕が残る場合があります、口や顔はいつも人目にさらされるため患者さんの心理面や社会的活動に影響を及ぼします。形態的にも機能的にも患者さんに満足してもらえ口腔外科治療をめざしたいと考えております。

④ 口腔外科学Ⅱ講座（三村保）

口腔外科の正式欧文呼称は顎・顔面・口腔外科で診療科名に顔が入っている唯一の科です。当科で最も多い手術は、口唇口蓋裂患者の口唇形成手術、口蓋形成手術で以下、顎変

顔談話会代表

伊 藤 学 而

形症の外科的矯正手術、顎骨骨折を含む顔面外傷、口腔癌治療などで、日々患者さんの顔をいかに良く治すかに取り組んでいます。治療成績向上には、手術後の顔の形を客観的に評価することが不可欠です。そのために顔の形や顔面骨の形を3次元的に計測し、一般的な顔（かならずしも美しい顔ではなく）と比較する事が我々の臨床の一部門となっています。

⑤ 歯科補綴学Ⅱ講座（長岡英一）

義歯と顔：歯がなくなると顔の下半分が短くなったり、口唇が落ち込んで、顔つきが変わる。この顔つきは義歯の使用によって歯があったときのように回復されるが、その回復程度あるいは老化による皺や溝の状態は義歯の出来具合に左右される。また、義歯の出来具合は、義歯患者の気分あるいは心理状態に影響し、ひいてはその時々のがんが創出する一過性の表情皺およびその積み重ねが形成する恒久的な容貌皺に影響する。

⑥ 歯科基礎科学（梶原和美）

臨床心理学の観点から、手術によって顔が変わる患者さんたちの体験がどのようなものであるかを調査しています。顎変形症の患者さんたちは、子供のころから自分の顔に違和感を抱き続け、ついには時間も努力も相当に必要な外科的矯正治療を決断します。彼らの「顔」体験はどのように構成されてきたのでしょうか？彼らに特有な心理的特徴といったものはあるのでしょうか？彼らの体験を検討していく中で、私たちの「自分の顔とのつきあい方」を捉え直してみたいと考えています。

最後に、本会では広く学内、学外より顔について関心、興味を持っている方々であればどなたでも歓迎いたしますので会員までご一報いただければ幸いです。

